

巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会
第14期 佐藤 祐菜

大半の大学生は「学生時代、何をやってきたか」という質問に対して、「サークルを頑張っていた」だとか、「アルバイトを頑張っていた」と答えるであろう。しかし、私はというと、「ゼミでの活動を頑張っていた」と真っ先に答えるであろう。私たち、慶應義塾大学商学部小野晃典研究会第14期生にとって「小野ゼミ」とは、学生人生の全てを捧げた、努力と情熱と青春の詰まった場所なのである。そして、今ここに、『慶應マーケティング論究』が完成した。この論文集には、慶應義塾大学商学部小野晃典研究会第14期生が、「小野ゼミ人生」の集大成として個々に書き上げた卒業論文をはじめ、卒業論文執筆以前に仲間と共に全力を尽くして取り組んで書き上げた三田祭論文や、国外の著名な学会で発表をした英語論文などが収められている。

不思議なことに人間とは、どんなに辛いことや苦しいことがあっても、過ぎてしまえばその時の辛さや苦しみを忘れてしまう生き物である。だから私が今、小野ゼミでの2年間を振り返ってみて思うことは、「ああ、本当に楽しい2年間だったな。」のひと言に尽きる。きっと、論文執筆やビジコンの準備に追われる毎日を過ごしていた過去の私は、何を言っているのだ、と怒るであろう。「楽しい」のひと言で片付けるな、と。そんな過去の私に怒られないよう、この場を借りて小野ゼミでの日々をもう一度振り返り、ここに記そうと思う。

私たち第14期生は、特段優れた能力を持ち合わせているわけでもなければ、大した知識量があるわけでもない、いわゆる平凡な大学生の集まりであった。だからこそ、私たち第14期生は、誰よりも努力しなければ先輩方のような立派な結果を出すことが出来ないと自覚していたし、少なくとも私は、小野ゼミに2年間の学生人生を捧げて、学べることは全て学び、強く立派な人間になりたいという思いで、研究活動に取り組んでいた。

そんな私たち第14期生が論文執筆に取り組み始めたのは、3年生時の6月頃である。私たちは、「日本語論文チーム」と「英語論文チーム」の2つの論文チームに分かれて論文活動に取り組み始めた。関東で最も優れた学生論文の執筆を目指す「日本語論文チーム」は、とにかく寝ない論文チームで、論文完成のためなら何徹でも出来る、というストイックな論文チームであった。国際学会に投稿し、日本国内だけでなく世界に向けて自分たちの研究を発信することを目指す「英語論文チーム」は、とにかく喜怒哀楽の激しい論文チームで、仮説が立ち、喜んで叫んでいるかと思いきや、次の瞬間には意見が対立して大喧嘩、という非常に騒がしい論文チームであった。雰囲気は全く違う2つの論文チームではあったが、1つ確実に共通していたことがある。それは、「どんなに辛くても、目標達成のために決して諦めず、自分たちの限界に挑み続ける姿勢」である。上述したように、私たち第14期生は、特段優れた能力があるわけではない。ただ、何が何でも目標を達成したいという気持ちの強さは、先輩方には負けないと自信を持って言える。論文活動は、決して楽しいだけのものではなかった。仮説がなかなか立たなかったり、仮説が立ったと思

いきや、分析が上手くいかなかったり、あるいは、チーム内での人間関係に問題が生じ、喧嘩をする毎日が続いたり。辛く苦しいことも多い毎日だったが、第14期生全員の揺るぎない気持ちの強さがあったからこそ、困難を乗り越え、質の高い論文を完成させることが出来た。そして目標どおり、両チームの論文とも国内外で高い評価を受けることが出来たのである。

4年生になった私たちは、チームでの論文活動から、個人での卒論執筆活動へと移行した。今までは辛いことがあっても、その辛さをチーム内で分け合うことが出来たが、個人となるとそうはいかない。壁にぶつかってしまい執筆がなかなか進まない状況に、一人で思い悩んでしまう同期もいた。私は、そんな同期を上手く助けてあげることが出来ず、より一層、苦しい思いをしたこともあった。自分の卒論でいっぱいになり、もっと同期と助け合いながら執筆活動を進めればよかったと、何度も後悔をした。そんな数々の苦難を乗り越え、なんとか卒論を書き上げることが出来た。卒論執筆活動をとおして、論文の書き方や考える力だけでなく、仲間がいることの有難さや、仲間との関わり方についても学ぶことが出来た。

本当に色々なことがあった、刺激的な2年間であったが、今、小野ゼミでの2年間の経験を振り返ってみて思うことは、やはり、「楽しかった」の一言である。ただそう思えるのは、人間が過去の辛かったことや苦しかったことを忘れてしまう生き物だから、ではなく、この刺激的すぎる2年間を通して、自分たちが人間的に大きく成長したと実感することが出来たからであろう。そして私たちがこんなにも、成長を実感することが出来たのは、2年間支えてくださった、たくさんの方々のおかげである。この場を借りて、皆様に心からの感謝の意を述べたい。

まず、同研究会第15期の後輩たち。後輩たちの指導を通じて、マーケティングの理解を深めるだけでなく、人に教える難しさを学ぶことも出来た。卒論中間発表のときには鋭い質問をして、論文の質を高めてくれた。ありがとう。

次に、同研究会第13期の先輩方。先輩方は、いつの時も、私たちの憧れの存在でした。いつか第13期の先輩方のようにかっこいいゼミ生になってやると志して入会したものの、そのかっこいい姿を日に日に更新されていく先輩方を目の当たりにした私たちは、いつまでも先輩方を越えられず、尻をたたかれてばかりでした。何度もご迷惑をおかけした私たちに、ゼミ活動の1から10まで、事細かく指導し、寄り添ってくださった先輩方には、頭が上がりません。本当にありがとうございました。

さらに、元大学院生の王 皓瑩さん(第10期大学院 OG)、現役大学院生の竹内亮介さん(第9期 OB)、中村世名さん(第10期 OB)、石井隆太さん(第10期 OB)、廖 舒忻さん(第11期大学院生)、川村澄明さん(第13期 OB)、清水亮輔さん(第13期 OB)、エリサベス ショー エンゲンさん(第14期大学院生)。大学院生の先輩方のお陰で、私たちは度重なるピンチを乗り越えることが出来ました。論文執筆に関してだけでなく、ゼミ運営や、プライベートの悩みなど、多くのことを親身に相談に乗っていただきました。本当にありがとうございました。

次に、家族のみんな。研究に没頭するあまり、帰宅が遅くなったり、外泊したり、ふさぎこんでしまったりした私たちを、全力で支え、見守り、いつも温かく、帰る場所を作ってくれた。私たちなりの学生生活を理解し、応援してくれてありがとう。心から感謝します。

最後に、慶應義塾大学商学部教授の小野晃典先生。小野先生の存在なくして、わたしたち第14期生は、大学生活を納得する形で終えることは出来なかったでしょう。大学生活最後の2年間、マーケティング研究に全力を注ぎたいという私たちの願いを叶えるべく、小野先生は絶えず背中を押してくださいました。私たちが過ちを犯してしまったときには、叱ってください、成長したときには、その成長を喜んでくださいました。大きな愛で私たちを包み、私たちが一步一步進んでゆく手助けをしてくださる小野先生を、私たちは家族のように思っていました。研究の価値、楽しさ、厳しさ、そして達成感を味わい、充実した大学生活を終えることが出来たのは、小野先生のお陰です。2年間、私たちを支え、導いてくださり、ありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。小野先生に教わったことや、ゼミ活動で経験したことをいつまでも忘れず、これからも目いっぱい前に進んでゆきます。本当にありがとうございました。

2018年3月吉日